

学習者の関心を呼び起こす取り組み

——「フランス文学概論」の場合——

瓜 生 濃 世

要 旨

本稿では、筆者が2010年度から2012年度春学期に京都産業大学にて行った「フランス文学概論」での実践を基に、学習者の関心を高めるための技法について考察する。最初に今日の大学生の性質と特徴に焦点をあて、従来の発想では円滑な授業運営が困難となっている理由を確認する。次に講義形式の授業において導入可能な技法とその効果について検討し、「文学」をどのような側面から扱えば学習者の関心を引き起こすことが可能であるか提言したい。今日の学習者に適合するよう創意工夫すれば、文学の授業が彼らの知的好奇心を涵養する場となることは十分可能であると思われる。

キーワード：フランス文学、恋愛小説、動機づけ、教授法、講義形式の授業

はじめに

今日、大学教員は授業の運営方法について深く模索せざるをえない状況にあると言えよう。いまや学生による授業評価の実施は当然となり、教員の教育能力が問われる時代となった。学生による授業評価という方法の妥当性はともかく、概ね学習意欲に乏しい傾向にある受講生を前にして授業を成立させる為に多大な労力を要するのが現実であり、教員は十分な教育能力を身に付ける必要に迫られている。授業を円滑に運営すべく教員は日々工夫を重ねなければならないが、現状は余りにも厳しい。大学全入時代を迎え、従来の学生像はすでに崩壊している。それに加えIT革命によってもたらされたネット社会の発達により、これまでの教育モデルが通用しない事態に陥っているのは明らかな。携帯電話やパソコンがあればごく短時間で膨大なデータにアクセスできる環境にあっては、教師が生徒に知識を伝達するというモデルは機能不全を起こしつつある。多人数相手の講義形式の授業ともなれば、学習者を十分に集中させる授業を実現することは容易ではない。

筆者は2010年度から京都産業大学にて「フランス文学概論」を担当することになった。はたして「フランス文学」に興味を持つ者はどの程度存在するのか——授業開始時、履修者達の関心がどこにあるのか全くイメージできないまま、まさに手探りでスタートであった。そして初年度の春学期は私語など多人数クラス特有の問題に苦しんだものの、「フランス文学って意外と面白い」という反応を目にし、一般的に若者が興味を持たないとされる「文学」の授業においても、工夫次第で彼らの関心を喚起する可能性が十分にあることを確認できた。本稿で

はこの授業における経験を基に、講義形式の授業において学習者の関心を高めるための技法とその効果について考察する。

1. 授業観の変換に向けて

1.1 授業の「非聴取」と「テレビ化現象」

周知のように大学は今や全入時代に突入し、大学生の学習意欲及び学力の低下が著しいというのが通説となっている。だが大学のレジャーランド化といった類の言葉は80年代から飛び交っていたのであり、一見するとこの問題は目新しいものではない。とりわけ文系学生の場合、専攻内容が就職と直結しない場合が大部分を占める。学業は必要最低限の取り組みで単位を取得し、なにはともあれ卒業して就職する、という道筋が長らく多くの学生の最大の関心であり続けていることは間違いない。

しかし今日我々が直面しているのは、単なる学習意欲や学力の低下という問題ではなく、大学生の根本的性格の変化ではないだろうか。島田（2002）は、学生にとっていまや授業は「情報」の収集場にすぎないと説明する。

授業の聞き方やノートのとり方の変化は、「授業は聞くものである」とか、「ノートは自分でとるものである」という、従来の教育学上の常識を常識でなくしている。現代の学生は、授業をそういうものとは捉えていない。学生は、授業で「知識や技能」を獲得しようとするのではなく、「情報」を収集しようとしている。学生の立場からみれば、授業での「学び方」よりも、授業周辺での「情報へのアクセス方法」の方が現実的な問題である。（p.173）

学生の「学び方」への無関心もさることながら、「知識」に対する関心の低さが顕著なのであり、彼らが関心を寄せるのは「情報」一辺倒なのである。知識や技能が情報化した結果、教師は「情報提供者」「データ出力者」の側面が強くなり、学生は「情報探査者」「情報処理者」「データ入力者」「データ消費者」になってしまったのだ（島田，2002，p.173）。そこにはもはや「何かを学ぼう」あるいは「学ばなければならない」という姿勢は存在しない。さらに島田は、「非聴取」という傾向を指摘する。内職をしながら授業を聞く、私語をしながらそれとなく教員の話にも注意を払う、という学習態度は決して望ましいものではないが、その根底にはまだ「授業を聞かなければならない」という通念が存在すると言えよう。島田はそうした「ながら聴取」の時代も急速に終焉を迎えつつあり、時代は「ながら非聴取」、「部分聴取」、「非聴取」に突入しており、大学は勉強するところだという固定観念を持つ教師との隔たりは大きい、と分析する（島田，2002，p.194）。大学生は授業に知識獲得を求めておらず、単位取得に関連した「情報収集」に関心を持つのだと教師は覚悟を決め、彼らと向かい合わなければならない。

「非聴取」の時代、多人数相手の授業運営は容易ではない。授業中に遭遇する諸問題を理解するのに、古宮（2004）が挙げる「授業のテレビ化現象」という分析が的確であろう（pp.81-82）。テレビならば番組開始時間に着席している必要もなく、私語は自由であり、また中座するのも自由だ。そして面白そうな部分だけ気まぐれに耳を傾ければ十分であり、内容に深く触れる必要もない。少人数の専門教育科目ならともかく、多人数の講義形式の授業においてこうした状況を回避するのは困難である。筆者にとって「フランス文学概論」は初めて担当する多人数クラスの授業であったが、当初私語や中座する者の多さに驚かされた。注意しても、全く怯むことなく延々と私語は続く。学生のモラル低下や教師の権威失墜は勿論だが、緊張感に欠けた彼らの様子はまさに「テレビを見ている」という描写が妥当であるように思われた。そう解釈すれば、数々のマナー違反も納得がいく。さらに携帯電話やこの数年で急速に普及したスマートフォンの存在を考慮に入れなければならない。指一本動かせば膨大な情報にアクセスできる機器が手元にあるのだ、受講生にとって教師の話は傾聴に値するであろうか。彼らの多くが携帯電話を手にする教室の光景は、もはやテレビを鑑賞するお茶の間ですらなく、各自が閉じこもる個室ブースが並んだ空間のようだ。「無語」というキーワードで大学生の気質を説明しようとしている島田に倣えば¹⁾、もはや学生は教室内で「無存在」とでも呼ぶべき状態に化しているようにさえ思われる。着席してはいるが、教師の話は聞いておらず、ノートもとらない。携帯電話で自分が関心ある情報にひたすらアクセスし続ける。教室到着時、出席管理認証システムにかざすのも携帯であるのが皮肉だ。授業に出席しているのはもはや本人ではなく携帯電話ではないか、そう嘆きたくなる状況である。

1.2 「学びのパラダイム」目指して

では、教師はどのような授業スタイルを実践すべきなのであろうか。古宮（2004）は「教えるパラダイム」から「学びのパラダイム」への転換を提唱し、その為には学生観の変換が必要であると述べている。従来の「教えるパラダイム」においては学生は空の容器であり、専門家である教師は知識を空の容器に注ぎ込むことが教育であった。それに対し「学びのパラダイム」においては学生は知識を発見し構築する能動的な主体だと見なされ、自分にとって何が大切かを判断する能力を持つ者である。さらに学びは集団的なものであり、他人と交流し、協力し、切磋琢磨することによって大きく促進される。学びは相互依存的なものであり、教室は互いの学びを増進しあう場であると古宮は述べている（p.10-11）。

この提言に基づき、フランス文学の授業を想定して具体的に考えてみたい。授業において、教員が絶対的な権力者として振る舞うことは適切ではない。知識を所有するというのが権力を保つ理由としてもはや機能しないのだ。例えば「スタンダールの『赤と黒』について」と講義を始めた時、学習者たちが手元の携帯電話でその言葉を打ち込めば、あらゆる種類のデータにアクセス可能だ。スタンダールの生涯について、『赤と黒』のあらすじについて、そして

作品についての膨大なコメントや評論の存在がすぐに確認できる。そうすると彼らにとってそれ以上講義を聞く理由など、存在しない。さらに小説を通読する理由も、見当たらない。課題レポートもネットサイトを適当に見繕ってコピー＆ペーストを繰り返せば、出来栄えはともかく、容易に完成可能であるからだ。そういった状況でどのようにすれば学生の関心を引き起こすことができるのか。「学びのパラダイム」においては、学生は能動的な存在として、知識を発見し構築する者である。こうした視点から作品を通して学生が何を発見できるのか、教師は真摯に考える必要があるのではないだろうか。作品が受講生と全く無関係なものではないと説得し、この作品があなた自身につながるものが必ずある、というメッセージを強く打ち出す必要があるのだ。そして古宮が述べたとおり、教室は互いの学びを増進しあう場でもあるから、各自が発見したものを紹介し比較することによって、新たな視点を獲得する機会を与える。手元の携帯ばかり眺めて個人的空間に閉じこもるのではなく、同じ空間で同じテーマを皆で学んでいるという連帯感を持つことができれば、授業参加意識も強化されることが期待できる。

BRD（当日ブリーフレポート方式²⁾）を創案した宇田（2005）も同様の見地に立ち、講義を「リフレイム」する必要があると説く。

BRD 方式では講義をリフレイムしている。教室とは学生がレポートを書く場なのだ、と規定して、講義の意味を根本的に変えてしまう。学生は教師から教わる人（受け身、one of them）ではなく、レポートを自己責任で書き上げる人（主体的、only one）である。そこでの教師の役割は、「レポート執筆の援助」をする人となる。逆に、従来の講義の見方では、学生が前面に出てきにくい。講義とは教師が学生に対して話を聞かせる場なのだ、という思いこみが、改革を妨げてきた。授業改革の工夫を続けていて、何か「急所をはずしている」と感じたのは、ここである。つまり、どれだけ教師がわかりやすい説明をしたところで、教師が主役という枠組み自体はまったく変わらず、学生は脇役にすぎなかった。学生が主役になれる場をつくる「しくみ」が欠けていたのである。（pp.121-122）

学生を「レポートを自己責任で書き上げる人」と見なし、主体的で only one の存在と捉える。そこには従来のものとは異なる学生観が存在すると言えよう。教師は学生が授業中に知的活動を為すための手助けをする者であり、学生達が主役となる「しくみ」を作り出さねばならないのだ。彼らを携帯でつながる仮想空間から教室の現実空間へと引き戻し、「あなたが主体的に取り組むべき事柄がある、そしてそれは取り組む価値がある」と明確な授業方針を掲げ、ひとりひとりの存在を尊重している、という態度で講義に臨むことが重要なのだ。

「質問書方式」を提唱する田中（1999）の実践報告も興味深い。田中は講義の最後に毎回「質問書」を提出させ、その内容で評価を行うという授業を行った。さらに提出された質問の一部をリストアップし、翌週その回答をプリントにして配布するという形式でフィードバックを実

施している。田中は質問書の提出とそれに対する回答によって多人数講義でありながら教師と受講生間で会話が成立したと述べ、この方式を「会話型多人数講義」と名付けている。また「質問書」の提出が評価対象となることにより、学生が疑問を持つことを促し、思考する習慣を身に付けさせ、知的能動性を高める結果が得られたと報告している (p.180)。この方式も「学びのパラダイム」と共通する学生観であろう。学生たちの講義に対する理解力や知的関心を前提とし、思考する者として質問を作成させる。また彼らは「回答書」を目にすることによって他の受講生たちの理解力や関心のあり方も知ることになり、それはさらなる知的探究心を喚起する。このようなフィードバックは教室を相互依存的な学びの場とするために欠かせない作業である。このように、今日の教師は受講生の主体性を尊重しながら知的好奇心を育む者として授業活動を行うことが望まれているのではないだろうか。

1.3 インターネット時代における講義形式授業の可能性

前述したように、スマートフォンに代表される高機能な携帯電話の普及が教室の風景を大きく変えてしまった。膨大なデータに容易にアクセスできる環境にあつては、受講生の関心が教師による知識の口頭伝達へと向かわないのはごく自然な摂理に思われる。ウェブ社会を論じた著作において西垣 (2007) は、今克服すべきは「教師も学生もともに『情報処理ロボット』にしてしまう、効率優先の通俗的な『知識社会論』である」と論じ、それ以上に重要であるのは正確なデータや知識を的確に組み合わせる焦点となる問題を解決に導く大局的・総合的な能力ではないか、と述べている (p.142)。そして「しみ込み型」と「教え込み型」という東西文化の伝統的教育方法の違いを紹介している。「しみ込み型」教育は長らく日本の伝統分野で実践されてきたスタイルであり、「習うより慣れよ」あるいは「わざは兄弟子から盗め」という方法——つまり「学習環境」と「お手本」を重視し、学習者は「場」のなかで模倣しながら自然に学んでいく。それに対する西洋由来の「教え込み型」教育は、教師が学習者に知識を注入していくという教育方法である。そして西垣は身についた知を習得できるのは「しみ込み型」ではないかと主張している。

これらふたつの型が、前述した「教えるパラダイム」と「学びのパラダイム」に酷似しているのは明らかであろう。学習者に知識を「注入」する西洋式から日本式教育方法に立ち返り、大学の授業に応用できないだろうか。「学びのパラダイム」同様、「しみ込み型教育」においても重要なのは学習者を主体的な者として見なすことであるのは自明である。「あなたがこの授業の主役です」と「学習環境」を整える。そして「お手本」は、教員ではなくクラスメイトに期待したい。前節で紹介した古宮の言葉にある通り、教室は切磋琢磨して互いに学びあう空間である。宇田の BRD 方式授業では、翌週必要に応じて補足説明を加えてレポートを返却、さらに優秀なレポートのコピーを配布しており、他の受講生によるレポート内容を知る機会が与えられる。田中の「質問書方式」においても、教員が作成した回答書によってクラスメイト達

が書いた質問を知ることができる。こうしたフィードバックは学生間のコミュニケーションであるだけでなく、一種の「お手本」の機能を果たし、学習者が思考能力や多角的な物の見方を獲得することが期待できる。実際に田中は、「質問書方式がもたらしたもの」として学生に対する知的揺さぶり、そして多面性視点の獲得を挙げている（p.166）。学生は他の受講生が自分とは全く異なる質問を書いている事を知り、ひとつの事柄に対する多義的な見方を経験して一種の「カルチャーショック」を受ける。それはまさに多人数の授業ならではの学習効果ではないだろうか。

後述するように筆者も「フランス文学概論」の授業において毎回小レポートの提出を義務付け、翌週授業の冒頭で紹介するというスタイルを実践したが、その答えの多様性に受講生たちは大いに刺激を受けていた。田中も似たような事を述べているが、一見無気力に思える学生でも、何か書かせると意外に面白いものが見受けられる可能性は高い。島田（2002）も次のような経験を紹介している。

学生は仲間の前で自分の意見や考えを表明することを必ずしも望んではいない。（…）授業にディベートやディスカッションを取り込もうとすると、翌週から姿をみせなくなる学生が少なくない。

とはいえ、毎回のように授業のおわりに意見や質問を書かせたり、授業評価を実施すると、内容のあるものが多くでてくる。次の授業など、できるだけ早い時点で学生に返答したり応答したりすると、その後ますます意見や質問の中身が濃くなる。しだいに心を開く学生もでてくる。授業以外のこまごまとした私事や、個人的な悩みごとや日々のつれづれまでも書き連ねてくる。（p.107）

クラス全員の前で意見を求められるのは、学生にとって多大な心理的負担となる。授業の活性化を目指して討論活動を取り入れたくとも、多人数のクラスならば特に抵抗は大きく、実現は困難である。だが島田の経験にあるように、感想文など間接的なコミュニケーション方法であれば学生は意見を述べることにそれほど抵抗がない傾向にある。それどころか、筆者も経験があるのだが、面と向かえば話すことはないと思われるごく個人的なエピソードを記すことも頻繁だ。こうした雄弁さを授業運営に生かさない手はない。そして筆者の経験で特に驚いたのは、いくら注意しても私語をやめない学生たちでさえ、小レポートは自分なりの言葉で不思議なほど熱心に文章を紡いでいたことである。無論芳しくない反応の者もいるが、私語をしているからあるいは携帯を触っているから授業内容に無関心であると判断するのは早計であろう。

SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）全盛の今、学生の多くは間接的なコミュニケーションが便利で手軽だと魅力を感じており、顔を合わせずに文字のみでコミュニケーションをとることに慣れている。そして授業においても、学生は文字で自分の気持ちを吐露

し、何らかのコミュニケーションにつながることを期待しているように思われてならない。そう理解しなければ、筆者が経験したように、授業で提出する小レポートに私事を屈託なく書く動機が不明なのである。まるでインターネットの匿名掲示板に書き込んで、反応を待っているかのようだ。自分のレポートについて教員やクラスメイトが何らかの反応をすれば、ある種の満足感が得られる様子なのである。そうした傾向を浅薄そして軽薄であり、大学生らしい思考能力に欠けると批判するのはたやすい。ただここに、多人数講義を運営する上での手がかかりがあるように思われてならない。「あなた達ひとりひとりが主役です」という学習環境を整えること——その為にはひとりひとりの存在を意識し、レポートの内容に反応し、「あなたの関心に注目しています」とメッセージを送ることが肝要ではないだろうか。インターネットであらゆるデータが手に入る時代、わざわざ教室に移動し、講義に出席する意味や価値はどこにあるのか。無論単位取得が第一目的とは言え、そういった外発的動機づけだけでなく、内発的な動機づけが伴えば理想的である。その為に教室でしか得られない価値を打ち出すべきなのだ。まずレポートの紹介を通じて自分の意見が目の前で尊重される感覚を与えること、それは教室外では容易に得られない貴重なものであろう。そして他人の意見に触れ、視野が広がること。普段は手にとらない文学作品に触れ、教室で全員が同じテーマについて考察するという連帯感の中で、多様な意見のあり方を肌で感じる。それはひたすらに自分の関心のみでつながるネット社会では得られない経験である。こうした観点のもとで授業を行うことが、いま求められているのではないだろうか。

2. 「フランス文学概論」における実践

筆者が担当した「フランス文学概論」は外国語学部の開講科目であり、受講生の約9割が外国語学部の学生であるが、他学部生も履修可能である。授業内の資料は全て日本語であり、フランス語の知識は求めない。春学期は教員による講義、秋学期は主に学生による発表が中心であり、内容が大きく異なる。本稿では講義形式の授業がテーマであるので、春学期の授業における取り組みを紹介する。履修者の数は2010年度春学期80名（内外国語学部69名）、2011年度春学期120名（内外国語学部106名）、2012年度春学期61名（内外国語学部56名）である³⁾。実際の授業出席者数は、平均して履修者の約8割前後である。

2.1 授業の流れ

春学期に取り上げる作品は『トリスタン・イゾー物語』、ラファイエット夫人『クレヴの奥方』、ラクロ『危険な関係』、スタンダール『赤と黒』、メリメ『カルメン』、フローベール『ボヴァリー夫人』の6編であり、授業テーマに沿ってこれらの作品を選択した。基本的に2回の授業でひとつの作品を紹介する。授業の流れは次のようなものである。冒頭で前週に提出され

た小レポートから代表的な意見を紹介し、コメントを述べる（レポート紹介時は、書いた者の性別のみ知らせる）。質問が書いてある場合は、回答する。当日扱う作品のあらすじや作者の経歴、参考文献や翻訳の抜粋等を載せた資料を配布し、教員が講義を行う。授業後半で映画を鑑賞し、最後 10 分程度で質問に対する小レポートを作成して提出してもらう。

2.2 授業テーマの選択

「フランス文学概論」を担当することが決定した際、テーマは筆者の裁量に任された。通史と講読の授業は別に存在する為、選択肢はそれ以外である。授業テーマを考えるうえで、経済学部教育に関したものはあるが、西山（2010）の論考が示唆に富む。西山は大学教育への動機づけに、大学生に「身近」な内容を組み込むことを提唱する。

これに対して、本研究課題は講義によって提供される教育の「内容」に直接に学生を「参加」させ、これによって動機づけを与えようとする。こうした教育の内容への「参加」とそれを通じた動機づけとして、本研究課題では各自が大学教育への関心を高め、その意義を理解し、学習への動機づけとなるような「話題」の提供を想定している。ここでは、意図的にであれ、他者による強制によってであれ、学生自身がいずれそこに当事者として実際に位置し行動することとなる、家計を中心とした社会生活の経済的側面に焦点を絞り、学生自身が実感を持って直接身近に感じ取れる「話題」を重点的に取り上げる。具体的には結婚費用、世帯形成のための準備費用、生活費用、離婚後の生活費用、就職と所得（業種、企業規模、学歴との関係）なのである。これらの「話題」を通じて、とりわけ社会生活の現実を学生に実態的に提示することにより、「話題」の内容に学生を「参加」させ、これによって大学での学習の意義と大学を卒業させることの意義を各自に認識させ、大学における学習への動機づけを形成・持続させることが主眼である。（pp.153-154）

西山は経済学部全体における教育を想定している。よって様々な学部の学生が履修するひとつの教養科目にすぎない「フランス文学概論」と大きく状況は異なるが、学生自身が「当事者」となって「実感を持って直接身近に感じ取れる」ような「話題」を授業テーマとする、という方針は十分応用可能であろう。西山は大学教育に関する動機づけの研究において方法的・技術面ではなく「内容」そのものに重点が置かれたものは多くないと指摘しているが、フランス文学も同様である。「内容」や「話題」と動機づけの関連性を実証するのは容易ではないが、前章で述べたような大学生の現状を考慮すれば、今後発展すべき研究分野であることは明らかであろう。

そしてこのような「当事者」感覚を重視して授業内容に「参加」させるという理念は、今日の学生に非常に適したものであるように思われてならない。同様の発想に基づき、釣（2001）

の実践報告も参考に挙げておきたい。釣はフランス語の授業でジム・ジャームッシュ監督の『ナイト・オン・ザ・プラネット』の「パリ編」を使用した経験を紹介し、このように結論している。

授業は「なぜパリが舞台なのに黒人のドライバーなのか」という「ひっかかり」を与える場である。そして「ひっかかり」をトップダウンの授業形式で啓蒙的に解き明かすのではなく、「今／ここ」に存在する自分の問題として自らの手で解き明かし、別の問題と結びつけることができるような方向へ導いてやることだ。そのためには、映画についてのアンケートをこまめにとり、小レポートを書いてもらい、それにコメントをつけたり、授業で取り上げたりしてフィードバックを地道に繰り返すインタラクティブな関係が必要であろう。フランス語の語学的な学習と平行して、文化を初めとする複数の領域に横断的に足を踏み入れながら、多岐にわたる問題が生々しい「現在」を目指してせめぎ合う場として教育や授業を考えていくことが、これから求められるだろう。(p.59)

何らかの「ひっかかり」を与えること、そして問題意識を持って思考する能力を養う場として授業を運営することに留意しなければならない。従来の学生像は崩壊していると述べたが、そもそも大学教育における伝統的な価値体系も崩壊しつつあるのが現実ではないだろうか。一般教養よりも実務に役立つことを求める傾向は強まる一方である。教師が一方的に知識を伝達するというモデルは再考が必要であろう。受講生の関心を引きつけ、自分自身が取り組むべき問題であると納得させ、知的探究へと向かう手助けをすることが教師の役割なのである。

「フランス文学概論」のテーマであるが、悩んだ末、筆者は受講生が少しでも興味が持てるのではないかという理由で「恋愛」をテーマとすることに決定した。そして前述した6編の小説を扱うこととなったが、その選択基準は一般教養として知っておくべき有名作品であること、恋愛という要素を通して親しみやすい物語であること、さらに映像作品が存在するということである。詳細は次節で述べるが、毎回映画鑑賞を通じて作品理解を深めることを目指した。

結果として、このテーマの選択は受講生の関心を引き起こすのに十分な効果を発揮したと思われる。「恋愛」というテーマを扱うにあたり、最初の授業はフランスにおける恋愛観について簡単な解説を行った。恋愛という概念は12世紀に「発明」されたこと、騎士道恋愛、結婚制度について、そして民事連帯契約(PACS)まで言及すれば受講生は俄然興味が湧くようだ。さらにこの時配布した資料に、戦後間もない日本で集団お見合い大会が行われた、という記事のコピーを載せておき、日本においても恋愛結婚が主流となったのはごく最近の現象であると触れておく。PACSの説明時には、フランスではそもそも未婚のまま子どもを育てるカップルが珍しくない等、日本社会とは異なる結婚観であることを説明する。このようにフランス文学

とは直接関係のない現代社会事情に触れる趣旨は、フランス人の恋愛や結婚観を知ることで日本人並びに自らの恋愛や結婚観について思いを巡らす機会を与えることにある。自分自身とも関係すると考えることができれば、授業内容への関心につながることが期待できる。実際、この回の質問は「授業を聞いての印象」という漠然としたものだが、小レポートを読むとひとりひとりが何らかの刺激を受けている様子が大きいのがうかがえた。恋愛を基盤としない結婚というものがそもそも考えられない、という意見は多い。PACSについて賛同する者もいれば、不快感を示す者もいる。以降、毎回恋愛に関連した質問を出して小レポートを提出してもらうのだが、その内容は個人の率直な思いが綴られているものが多く、授業に十分興味を持っている様子であった。授業開始時、筆者は「恋愛」をテーマにするのはやや安易ではないかと危惧したが、受講生は予想以上に真摯に考察していた。作品毎に全く異なる形の恋愛が描かれている点も彼らには興味深かったようである。さらに予想外であったのは、「恋愛」が授業テーマとなることに新鮮味を感じる者が多かった様子である。授業を新鮮に感じるという状況は、彼らの好奇心を向上させることが期待できる。

2.3 多様な教材の使用

文学の授業ではあるが、視聴覚教材も積極的に利用した。その代表例が、前述した映画作品の鑑賞である。6編の小説にはそれぞれ複数の映画が製作されており、2週にわたってひとつの小説を解説するというペースであるから、映画は2種類の異なる映画を紹介する事が可能である。例えば『トリスタン・イザー物語』の場合、最初の週は2006年にアメリカで製作された『トリスタンとイゾルデ』、そして翌週はジャン・ドラノワ監督による『悲恋』（1943年）を鑑賞する。『危険な関係』であれば、グレン・クレーズ主演『危険な関係』（1989年）とロジェ・ヴァディム監督『危険な関係1960』（1959年）を取り上げる。正統派の歴史劇、そして原作を大胆に脚色した現代劇という対照的な2作品の鑑賞を通じて、まずは作品自体が学習者の印象に深く残る効果が期待できる。中世の風景や貴族の宮廷社会が映像化に非常に適しているのは言うまでもない。テキストの文字で見るとよりも視覚を通した方が登場人物たちが身近に感じられることは明らかである。さらに異なる脚色に触れることで、原作小説の魅力を多義的に捉えることも可能となる。『ボヴァリー夫人』の場合も、クロード・シャブロール監督作品（1991年）を鑑賞すればヒロインであるエンマの生活環境や服装が変化していく様子が非常にわかりやすい。残念ながら授業中に全編を見せる余裕はないが、文学作品に親しむきっかけとして映画は格好の教材である。小レポートにも、映画が印象に残ったというコメントが多数見受けられた。普段は読書をしない者にも、映像であればなんらかの「ひっかかり」を与える可能性は高い。

『ボヴァリー夫人』に関して言えば、「絵で読む世界の文学シリーズ」として姫野カオルコが文を手がけた絵本版も抜粋して使用した。絵本とは言えあくまでも大人向けに創作されたもの

であり、平易な文章ながらも現代的な語彙で原作の魅力を損なわずに伝えている作品である。『ボヴァリー夫人』入門編として、翻訳の文体に馴染めない受講生の心理的負担を下げる事が可能だ。例えば、エンマとシャルルの結婚式の場面は次のように語られる。

田舎の結婚式。

年寄りがいっぱい。子供がいっぱい。

お肉がいっぱい。お菓子がいっぱい。

草花がいっぱい。光がいっぱい。

「ああ、幸せだ」

新郎シャルルはみち足りる。

美しい妻を、シャルルはだいじに扱った。

飲まない。打たない。買わない。健康。

開業免許医の安定した収入。

三拍子どころか、五拍子、六拍子そろった理想の夫。

いつまでも少年のままの心を持った、やさしいシャルルをこそ、
理想の夫と呼ばずして何と呼ぶ？

ところが、ほかの呼び方はあった。

ダサイ人。⁴⁾

このページを教員が読み上げると、最後の「ダサイ人」というフレーズで明らかに受講生たちが反応した。その一言で、作品が決して自分と無縁の世界ではないという実感が湧くようだ。もちろんフローベールの翻訳テキストも抜粋して配布するが、率直に言って反応は芳しくない。まずはこの絵本版を利用して、少しでも物語を身近に感じてもらうことが重要ではないだろうか。さらに『ボヴァリー夫人』はいがらしゆみこによる漫画版⁵⁾も存在するので、印象的な場面を数ページ抜粋して配布資料に載せておく。このように原作小説、絵本版、漫画版そして映画と異なる複数のジャンルの教材を使用することにより、受講生が一番親しみやすい形式を通して作品を認識できる効果が期待できる。

さらに「恋愛」というテーマに関心を向けさせるため、関連した内容の新聞記事も使用した。例えば現フランス大統領が事実婚であることを報じた記事、そして恋愛相談の記事など。無論文学とは直接関係はないが、「同時代の空気」を何らかの形で授業に持ち込むことは非常に重要であると筆者は考える。それは「当事者感覚」をもたらす効果が期待できるからである。中世から19世紀のフランス文学がテーマとなれば、受講生にとって自分との接点を見出すのは時に困難だ。そこで記事のコピー配布を通じて、この授業では恋愛という要素に注目しているのだ、というメッセージを強く打ち出す。恋愛で葛藤する人間の姿に普遍性を見出し、現代に生きる自分たちと小説の登場人物たちが地続きである感覚が少しでも獲得できれば、授業内容への関心が強まるであろう。

「同時代の空気」を持ち込む為の方法として、テレビ番組の利用も挙げられる。日頃から授業に役立ちそうな番組を調査していた折、NHKで放映された番組の中に「恋愛」に関連したテーマで非常に有用なものをいくつか見出すことができた。その内容は、様々な国における恋愛観についての紹介、社会学者による現代の恋愛事情分析、お見合い結婚と恋愛結婚の満足度を上げるシーナ・アイエンガー⁶⁾の講義番組等であり、これらの録画を授業中に鑑賞した。やはりテレビ番組は巧みに構成されているので受講生たちは集中する。また、異なる学問分野からのテーマアプローチは受講生の知的探究心を強く刺激する。一見娯楽色が強くとも、番組の内容が授業テーマと結びついているのは明らかであったので、彼らが趣旨を十分に理解して鑑賞した様子が小レポートからもうかがえた。

さらに質問時にも「同時代の空気を持ち込む」ことを可能な限り心掛けた。例えば『カルメン』であれば鹿島茂の著作⁷⁾を援用して「ファム・ファタル」について説明し、「あなたが今までに出会ったファム・ファタルと呼べるヒロインを教えてください」と質問する。小説に限らず漫画やアニメ、テレビドラマや映画などフィクションの作品であればジャンルは問わない。毎年小説のヒロイン名を挙げるのは数名であって答えはまさに多種多様であり、学生たちが親しんできた作品が具体的にわかるのが興味深い。当然翌週のレポート紹介時にも、どのようなヒロイン名が挙がるのか皆興味津々の顔つきで聞き入っていた印象である。『ボヴァリー夫人』であれば、エンマの恋愛観や結婚観には小説の影響があることを解説し、これを現代に置き換えて考えてみようとい問かける。我々は幼い頃から様々なメディアを通じて膨大な情報を受信し続けており、読書だけでなくアニメやマンガ、テレビドラマや恋愛シミュレーションゲーム等で恋愛を経験する前に恋愛の存在を知り、何らかの恋愛観が形成されている。そういったメディアの影響をどう考えるか、という質問を行えば受講生に具体的なイメージが生まれ、理想と現実苦しむヒロインに関心が湧くようだ。

2.4 小レポートの実施とその反応

すでに述べたとおり、授業最後に教員が質問を出し、それに答える形で受講生はB6サイズ

用紙の小レポートを提出する。田中（1999）の質問書形式の授業のように、その内容を評価対象とするのが理想的ではあるが、筆者は「3行以上書いていれば満点」という評価基準のみ示した。実際には3行で済ませている受講生は少なく、用紙の半分以上を使用している者が大半であった。中には明らかに授業を聞いていなかったと思われるレポートもあるが、評価の大部分は学期末レポートあるいは定期試験で行う為、一回のレポート点が実質2～3点分にしか相当しないという事情もあり、基本的には提出された物は全て満点としていた。率直に言ってレポートの内容に差が存在するのは明らかである。こういった要素を減点対象にすべきか、明確な基準作りを今後の検討課題としたい。

前節でも少し触れたが、質問の内容をさらに挙げると『トリスタン・イズー物語』であれば「媚薬によって恋に落ちることについてどう思うか」、『クレヴの奥方』であれば「奥方の夫への告白についてどう思うか」であり、受講生自身の考えを自分の言葉で表現してもらうような問いをする。そしてその結果が、毎回非常に興味深い。無論テキスト全編を読んだうえでの回答ではないので一般論的な記述になるが、筆者はあえてそれを想定していた。興味がある者は秋学期も履修して発表を行う機会が得られるので、春学期はあくまでも作品を認識することが目標である。質問に対して肯定的か否定的か、おおまかに二分される傾向はあるものの、その理由づけは様々であり、独創的な視点で答えを書く者もいる。翌週、授業冒頭で代表的な意見そして個性的な意見をいくつか紹介する。時代背景等を一切考慮せずに自分の考えを一方的に述べたレポートも散見されるが、それを稚拙だと評価するのは避けたい。興味を持てば、詳細な情報はいくらでもリサーチすることが可能であるのだ。知識を深めるためには、まずは関心を持つことから始めなければならない。中世も19世紀も「昔」と一言でまとめる彼らが、現代と状況は異なれど共感できる部分もある、あるいは違和感がある、そうした「何か」を文学作品に見出すことができれば、教室に足を運んだ価値は十分あったと言えるのではないだろうか。

さらに前述したとおり、他の受講生が書いたレポートの内容を知ることによって多義的な視点を身に付け、知的関心を増大させる効果も期待できる。次節で紹介する感想にも見られるとおり、他の受講生の意見に対する興味は概ね強く、自分と異なる見方を知って「勉強になった」という声は多い。テーマが「恋愛」であるため、時には生々しい意見も見受けられる。豊富な恋愛経験を匂わせる意見もあれば、自分は一度も恋愛したことがない、という告白めいた記述もある。おそらく普段は口にしないであろう事でも、あくまでも授業課題として冷静に考え、臆することなく文字にしている者も多かった印象だ。そして授業が進むにつれ、「恋愛」について考えることは人間や人生そのものについて考えることに他ならないと感じている様子もレポートの文面からうかがえた。このように小レポートの提出と紹介は、多人数の講義で受講生の関心を呼び起こすために非常に効果的であると思われる。

2.5 受講生の感想——「フランス文学」で学べること

春学期最後の授業は学期全体の復習，そしてサルトルとボーヴォワールの紹介ならびに彼らについての印象を一般のフランス人がインタビューで答える様子を収録したテレビ番組の鑑賞であった。春学期に紹介した6作品は全て恋愛と結婚が結びつかない状況にある。あえて結婚という制度を選ばないふたりの姿に，受講生たちもそれぞれ思うところが多い様子であった。

そしてこの最終授業での質問は，今回の授業もしくは学期全体を通じての感想，というものであった。そこで寄せられた様々な感想を内容に応じて分類し，紹介したい。まずは主に「恋愛」というテーマについての意見である。参考までに，学部と性別を記す。

- ・私は，ラブストーリーが一番好きなので，全ての授業の中であまり勉強という感じの授業でなく毎回楽しい時間をすごすことができました。(外国語学部・女)
- ・フランスの恋愛について学ぶというよりは恋愛そのものについて深く学んだような気がします。とても楽しい授業でした。もっと，恋愛についてしっかり考えなければならぬのではと考え直させられる授業もありました。また，授業で見た作品の登場人物について，友だちと話したりするのめたのしかったです。(外国語学部・女)
- ・普段，友達や家族，周りの人間と恋愛についてこんなにも深く考えたことがありませんでした。しかし，今回こういった授業で小説や映画を参考に意見を交換することができて，自分の考えに大きな広がりができたような気がします。(外国語学部・女)
- ・この春学期，様々な恋愛の作品をやってきたが，どれ一つとして同じようなものがなく，それぞれに魅力を感じた。幻想的でもあり，現実的な文学に“恋愛観”というものが変わった。(外国語学部・男)
- ・今回の授業というか15回うけてみて普段から考えたことのなかった，特に恋についてすごく楽しくうけられた。授業の初めに前回のレポートでみんながどう思っているのかとか，自分の意見が発表されてちょっとうれしかったりした。(…)実生活でも何かしら考えるようになって，なにげない所でも絵になるようなシーンを想像してしまうようになってしまった。授業をこんだけ真剣に聴いたのは初めてだったので秋もとうろと思っています。(外国語学部・男)
- ・私はこの授業を受けるまでは恋愛や結婚に全く関心がなかった。この授業の最後を書く感想で他の学生の恋愛観などを知るのが楽しかった。受け終えて恋愛もいいものだなと思った。できたらしてみたい。(法学部・男)
- ・フランス文学は今まで中高とふれる機会がなかったのでとても新鮮でした。しかし，恋愛は世界中共通なんだな—と思いましたし，共感できるところもありました。(外国語学部・女)
- ・授業を通しての感想ですが，今までに恋愛についてこれほど真剣に考えて文字にするこ

とがなかったので、とても新鮮で楽しかったです。自分の感想が読み上げられるのも嬉しいようで恥ずかしいようで不思議な感じでした。他にこのような授業があれば、履修したいと思います。(外国語学部・男)

- ・この授業は、他の授業とちがって、とても私の興味をそそる授業内容でした。恋愛というテーマをいろいろな人が様々な表現をしているのをみたりきいたりして、とても自分の中でためになりました。(外国語学部・女)
- ・今までの教育では教えてもらってない愛について、フランス文学から考えるという、新鮮な授業でした。新しい本にふれあえたし、意味のあるものだったと思います。いっぱい考えさせられました。(法学部・男)
- ・私は、小説を読むのが得意じゃないけれど、「恋愛」が関係しているとスラスラよめる。これからも色々なフランス文学に触れ合っていきたい。(外国語学部・女)

このように「恋愛」は身近でありながら奥深く、また授業で触れる機会が少ない為、テーマ自体が学習者の関心を引き付けた様子がうかがえる。また、フランス文学がこのテーマに格好の材料であることは間違いない。こうした利点を生かし、文学の授業としてどのようなアプローチでテーマを深化させていくことが可能であるか、今後も検討を重ねたい。

次に、映画鑑賞や作品解説についての感想を見てみよう。

- ・フランスの文学について今まで無知だったけどこの授業を通して成長できたと思う。授業も映画での説明を取り入れるなどの工夫がされていて学生にあきさせず楽しくフランス文学を学べる環境づくりをした先生は偉いと思った。この授業をとって良かったと思った。(法学部・男)
- ・映画など私はあまり観ないので、この授業をキッカケに色々学べてよかったです。(外国語学部・女)
- ・授業を受けて、色々参考になったことがある。一つは生徒の意見が先生の口から聞けたので客観的に恋愛について考えれた。また、映像を通してわかりやすく勉強できたことである。(法学部・男)
- ・授業をしてきて、今の私たちと置き換えて考えるとところが、作品に対して親近感がわきやすく、わかりやすかった。(外国語学部・女)

学期全体を通じての感想を求めた為か映画に対するコメントは少なかったが、毎回の小レポートを見ても映画に対して好反応を示す者は多かった。「古い映画の方がおもしろい」という意見が寄せられたこともある。普段自分では選択することのない文芸映画を鑑賞する機会が得られることは、授業に出席する価値のひとつであると感じている様子も見受けられた。

最後に、小レポートについての感想を紹介したい。自分の意見を書くこと、そして他の意見を聞くことに関心を寄せる受講生は非常に多い。

- ・フランスの恋愛はもちろん、様々な恋愛観について学べて、自分自身で考える事ができ、とてもためになりました。自分の意見だけでなく他の人の意見も知る事ができて様々な角度からフランスの文学を理解できて満足です。(外国語学部・女)
- ・毎回終わりに小レポートを書くのが楽しかったです。人の意見を聞いて、「とても大人な考え方だな」「そういう見方もあるんだ」と思えました。(外国語学部・女)
- ・他人の考えや意見を聞くのがとてもたのしかったです。この授業は、フランス文学についての学習ですが、恋愛学的内容が多くてとてもたのしかったし、自分の恋愛観と他人の恋愛観を比較してみたりして、とても興味深かった。(外国語学部・女)
- ・普段は、あんまり考えないことを、最後の感想などで書いたりして、他の人がどう感じ考えているのかとか、自分にはない考え方なども知ることができて、いろいろ勉強になった。(外国語学部・男)
- ・みんなのレポートの紹介で、みんなの意見を聞けて多種多様でおもしろかったです。(外国語学部・女)
- ・今日で授業が終わるのはさみしいです。みんなが考えていることを聞いたりするのは楽しかったし、恋愛をテーマにするなんてとてもおもしろかったです。(外国語学部・女)

教員の予想以上に学生は他人の意見を知ることに関心を持っていた。授業を共同で学ぶ場と捉え、教員から一方的に知識を伝達するのではなく、レポートのフィードバックを通じて教師と学生間そして学生同士でインタラクティブな関係を築く。全員が当事者となり、意見を発信し合い、多種多様の意見に触れ、新たな視点を獲得する。そうした過程で知的探究心も生まれることが期待できる。知識欲を持ち、ひとつのテーマについて掘り下げ、様々な視点を意識しながら自分なりの意見を作り上げること——フランス文学の授業においてもこうした学習の場を目指すべきであろうし、工夫次第でそれを実現する可能性があるはずである。

おわりに

すでに述べたとおり、「フランス文学概論」は筆者にとって初めての多人数授業であった。毎回の小レポートを設定したのは出席を促す為であり、さらに何か書くことを強制すれば講義内容に関心を持つであろうという漠然とした期待に基づいていた。よって初回の授業で提出された小レポートを読み始めた時、学生たちが自分なりの言葉で綴る内容に新鮮さを覚えたのは完全に想定外の出来事であった。それ以前にも別の授業でレポート課題を実施したことはあっ

たが、ひとつの質問に対して多くの学生が簡潔に意見を述べる、という形式が初めてであったせいかもしれない。これはぜひ教室で紹介しなければならない、という使命感が芽生えたのであった。

授業冒頭でレポートを紹介する時、ある種の高揚感が教室内に漂う。他人の考えを知る楽しみ、そして自分の意見が紹介されるかもしれないという期待や緊張感を味わうことは、大学生活において非常に意義深いものであると思われる。2012年度春学期には、友人に話を聞いて興味を持った者が聴講に来るという出来事もあった。大学生の関心のあり方を探るのは容易ではないが、「恋愛」が彼らの意表を突く新鮮なテーマであることは明らかだ。同様の効果が期待できる別テーマの選択および小レポートを通じた文章法の指導も視野に入れ、テーマの深化そして学習者のさらなる関心を引き起こす教材や技法の研究を今後の課題としたい。

注

- 1) 島田は「無語」とは「授業中、学生が公的な発言を回避し、授業に参加しようとはしない、もしくはしないようにみえる状態」、「クラス場面において、学生同士ではコミュニケーションを進めることがあっても、教師とはコミュニケーションしようとはしない状態、あるいは教師が介在するコミュニケーションには参加しようとはしない状態」であると定義している。島田博司（2002）、『メール私語の登場—大学授業の生態誌 3—』、玉川大学出版部、p.176.
- 2) BRD 方式（当日ブリーフレポート方式）は「教師による説明中心の伝統的な講義方式の意味をまったく変えてしまう革新的な方法」として考案された。講義の当日、授業冒頭でテーマを発表し、90分で受講生に A4 サイズ 1 枚の簡単なレポートを書くよう求める、というスタイル。このレポート設定によって授業の到達目標を具体化し、注意集中度を高める狙いがある。宇田光（2005）、『大学講義の改革 BRD（当日レポート方式）の提案』、北大路書房
- 3) 2010 年度は評価方法を授業内小レポートとレポート試験にしたところ、2011 年度に「レポートで単位取得可能」という理由で履修者が増えた為、2012 年度は小レポートと定期試験に変更し、履修者が減ったという経緯がある。
- 4) フローベール、文一姫野カオルコ、絵—木村タカヒロ（2003）、『ボヴァリー夫人』、角川書店、p.21.
- 5) いがらしゆみこ（1997）、『ボヴァリー夫人』（原作フロベール）、中公文庫コミック版
- 6) 『選択の科学』で広く知られるようになったコロンビア大学ビジネススクールの教授である。シーナ・アイエンガー（2010）、櫻井祐子訳、『選択の科学』、文芸春秋
- 7) 鹿島茂（2003）、『悪女入門 ファム・ファタル恋愛論』、講談社現代新書

参考文献

- 田中一（1999）、『さよなら古い講義 質問書方式による会話型教育への招待』、北海道大学図書刊行会
 釣馨（2001）、「異文化理解のツールとしての映画」、『Rencontres 15』、関西フランス語教育研究会、pp.57-59.
 島田博司（2002）、『メール私語の登場—大学授業の生態誌 3—』、玉川大学出版部
 古宮昇（2004）、『大学の授業を変える—臨床・教育心理学を活かした、学びを生む授業法—』、晃洋書房
 宇田光（2005）、『大学講義の改革 BRD（当日レポート方式）の提案』、北大路書房
 西垣通（2007）、『ウェブ社会をどう生きるか』、岩波新書

西山茂 (2010), 「講義形式の授業と大学教育における学習への動機づけ」, 『九州国際大学経営経済論集』第16巻第2号, pp.147-160.

また, 以下の文献を参考資料とさせて頂いた。

バーバラ・グロス・デイビス・他 (1995), 『授業をどうする! カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』香取草之助監訳, 東海大学出版会

宇佐美寛 (1999), 『大学の授業』, 東信堂

杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ編著 (2004), 『大学授業を活性化する方法』, 玉川大学出版部

アラン・プリנקリ他 (2005), 『シカゴ大学教授法ハンドブック』小原芳明監訳, 玉川大学出版部

中井俊樹, 中島英博 (2005), 「優れた授業実践のための7つの原則とその実践方法」, 『名古屋高等教育研究』第5号, pp.283-299.

金子元久 (2007), 『大学の教育力—何を教え, 学ぶか』, ちくま新書

大塚英志 (2010), 『大学論—いかに教え, いかに学ぶか』, 講談社現代新書

関西フランス語教育研究会 (2011), 「異文化理解と外国語教育——大学における教養主義教育はどこに行く?」(コーディネーター: 野崎次郎 パネリスト: 内田樹, 芦田宏直, 西山教行), 『Rencontres 25』, pp.97-104.

Enhancing Student interest in French literature

Atsuyo URIU

Abstract

Based on the author's experiences in the class "Introduction to French literature" in the spring semester from 2010 to 2012 at Kyoto Sangyo University, this paper discusses the way of teaching which arouses student interest.

As the character of student has changed, it is obvious that the traditional approaches in teaching at the college classroom are not effective any more. The author presents the activities and materials which increase students' motivation. Studying French novels could enhance intellectual interest of students if the teacher manages the classroom in the suitable way.

Keywords: French literature, love story, Motivation, teaching method, lecture method